

「新 ことばの科学入門」

G. J. Borden, K. S. Harris and L. J. Raphael ● 著

廣瀬 肇 ● 訳

B5・280頁

定価 6,510 円(税 5%込) 2005 年・医学書院

評者 立石 雅子(慶應義塾大学病院)

言語聴覚士の業務領域は、聴覚、成人言語、小児言語、発声発語と多岐にわたるが、いずれの領域の障害を対象とする場合にも、話しことばはその中心を占めている。それゆえ、話しことばの生成と知覚に関する仕組みを学ぶことは、言語聴覚士を目指す学生すべてにとってのファーストステップである。この仕組みの包括的な理解が、聴覚器官、発声発語器官および大脳の生理・解剖学、言語学、音声学、音響学、聴覚心理学など専門基礎領域の重要性の自覚につながり、専門領域である言語聴覚障害学へと学習を発展させていく過程における重要な鍵となる。

本書では、まず話しことばの言語における位置づけから論を起し、ことばの生成と知覚に関し音響学、発声発語器官の解剖生理、ことばの生成とフィードバック機構、聴覚の解剖生理、聴覚心理学などが有機的に構成されていることに特徴がある。読者はそれぞれの部分を独立したものとしてではなく、一貫性のある体系として話しことばに関する知識を学ぶことができる。原書は1980年の初版以来、およそ四半世紀にわたり第4版まで版を重ねた、隠れたロングセラーともいえるべき本である。音声科学についての広汎な知識を統合的に伝えることを目的とした著者らの意図は、叶えられたと言える。

本書ではウェブサイトを通じて音のサンプルを聴取でき、本文で記述されている内容を確認することも魅力となっている。

本書のもう一つの魅力は廣瀬肇博士の文章にある。音声科学は言語聴覚士が最初に学ぶべき領域ではあるが、易しい分野とは言い難く、読みにくい翻訳調の文体の入門書では、内容の理解がますます困難となって途中で挫折しやすい。しかしながら、翻訳調を廃し、大和ことばで書かれた本書は、容易に読み進むことができる。巻末の用語解説もアルファベット順ではなく五十音順とするなど、初学者への配慮も随所になされている。

原書第2版の訳も手がけられた廣瀬博士は、著者との親交が深く、彼らの意図を最もよく理解する立場にある。また、東京大学医学部音声言語医学研究施設において音声言語に関する研究に長らく従事された本領域の第一人者であり、さらに北里大学において言語聴覚士の養成にも携わってこられた。本書の翻訳者としてこれ以上の適任者はいないと思われる。

養成課程が50を超え、言語聴覚士の数の充足は確実視される状況となった。いかにして質の高い臨床家を送り出すかということが課題となっている現在、言語聴覚士を目指す学生に教科書として是非、最初に手にしてほしい1冊である。同時に養成に携わる教員にとっても、臨床に携わる言語聴覚士にとっても、今一度、初心を確認するため通読し、座右の書として手元に置きたい1冊である。